復興庁
Reconstruction Agency

ジモトではたらく

福島県版

令和３年１月発行

地元就職のススメ

地元か地元以外か。
働く場所は、就職を決めるときに
頭を悩ませることの一つです。
実は地元には、地元ならではの特徴を生かし、
事業を展開している企業がたくさんあるのです。
また、その地域で働いているからこそ得られる
喜びや魅力があるものです。
働くということにおいて、
「ジモトではたらく」という選択をした人たちに
スポットライトを当てて、
地元企業の仕事や地元で暮らす魅力を紹介します。
今こそ「ジモトではたらく」ことに注目してください。

Contents

地元就職のススメ …… 2
巻頭インタビュー …… 4
地元にもチャンスがある
自分らしく成長できる働き方を見つけよう
横田　浩一さん
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授
復興の力にと故郷で再就職
地域に根差す店づくりに奮闘 …… 8
小川　有哉さん
株式会社野馬追の里 セデッテかしま副店長 2015年入社
被災者との出会いから移住へ
おもてなしで結ぶ福島と四国 …… 12
片岡　貴夫さん
旅館 抱月荘 2018年入社
農業で復興に貢献
トマトと自分の夢を育てる …… 16
川上　祐輔さん
南相馬復興アグリ株式会社 グロアー 2015年入社
都会と地方の違い …… 20
地元で働くことを考えよう …… 23

巻頭インタビュー

地元にもチャンスがある

自分らしく成長できる働き方を見つけよう

慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
特任教授　横田　浩一さん

コロナ禍で注目「地方で働くこと」

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、世の中の仕組みが大きく変化しています。それは、就職や働き方を取り巻く環境についても、例外ではありません。特にリモートワークやテレワーク、副業など、働き方の分野において、大企業でも改革が加速したと感じています。

リモートワークは、２０２０年4月の緊急事態宣言を受け、都市部を中心に急速に拡大。東京では宣言の解除後も、出社率を半分以下まで減らしている企業があります。さらに、「アフターコロナ時代」を見据え、一部の大企業ではリモートワークの常態化や、本社を東京から地方に移転する試みなどが始まっています。

私が仕事で全国各地を訪れ、若者の声を聞くと、地元で働きたいと思っている若者がたくさんいます。しかし「やりたい仕事が無い」「給料が安い」という理由で、東京や都市部に関心が移ってしまう。こうした構図がこれまでありました。

コロナ禍を機に、東京にいないと働けないという状況は崩れつつあり、「地方で働くこと」に関心が集まっているように感じています。おそらく今の若者も、同じ感覚を抱いているのではないでしょうか。

未来への不安と働きがいの低さが課題

コロナ禍の影響により就職活動が大きく制限される中、学生たちは想像以上の苦労を経験しているはずです。

さらに、これからの「人生１００年時代」に向け、年金の受給額も少なくなることが予想されます。また、同じ会社に長く務める時代から、転職が当たり前の時代に向かっています。

こうした混沌とした状況下で、自分のキャリアについて悩み、不安を感じている若者が多いことでしょう。私も学生から、「どういう仕事に就いたらいいか」「どんな企業を選べばいいのか」という相談をよく受けています。

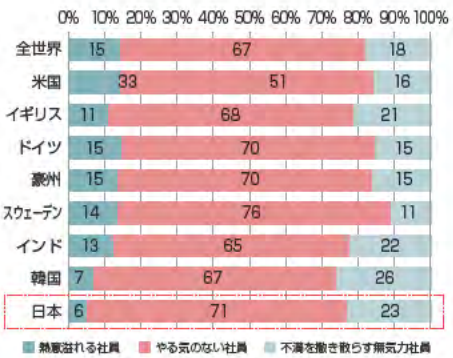
将来について不安を感じる若者が多いことは、就職を取り巻く課題の一つと言えます。

また、日本のビジネスパーソンの仕事に対するモチベーションの低さも問題となっています。東京の企業で働く人のモチベーション、つまり「働きがい」は、先進国の中で最低といわれていて、ある海外の調査で、日本には「熱意あふれる社員」の割合が６％しかないという報告もあります。（図1）

その理由として、利益優先の企業体質や良い先輩ロールモデルがいない、チャレンジできる機会が少ない、組織の閉塞感などが指摘されています。

実は、国が進める働き方改革は、ワークライフバランスや残業時間の削減など、働きやすさを向上させるもので、働きがいを向上させるものでは無いと考えています。これからは、働きがいがある仕事や会社を選んでいくことはとても大切になることでしょう。

図1　世界各国の仕事への熱意度調査



「State of the Global Workplace (2017)」GALLUP社　より作成

実はあまり変わらない東京と地方で働く意識

CARRER FORが行った「東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査」※1によると、「働きやすさ」と「働きがい」を比較した結果、東京と地方では明確な差が表れませんでした。（図2）

この結果は、良い仕事が多く、平均年収も高い「働きがいを感じる東京」。そして、自宅と職場が近くワークライフバランスもとりやすい「働きやすさを感じる地方」という予想に反した意外な結果となりました。

こうした、実際に働く人の意識調査からも、地方で働くデメリットが少なくなっていることがうかがえます。

大企業で働くことは、大きな組織の中で成長できることに期待しがちです。しかし、小さい組織である地方の企業の方が、若いうちからさまざまな仕事や立場を経験でき、早く成長を実感することができると考えています。

また、大企業ではたくさんいる同僚やグローバルなビジネスを通して出会う人たちによって、多くの経験や人脈を獲得することができます。しかし、オンラインでできることが増えた時代。自分の努力次第では、地方でも同様のことが可能だと思っています。

そう考えると地元就職のデメリットは、それほどないのではないでしょうか。

「地方は東京より人が少ないが、声を掛けてくれる人はたくさんいる。地方の方が幸せを感じることができる」。これは、愛媛県で地域おこし協力隊に参加した学生の言葉です。

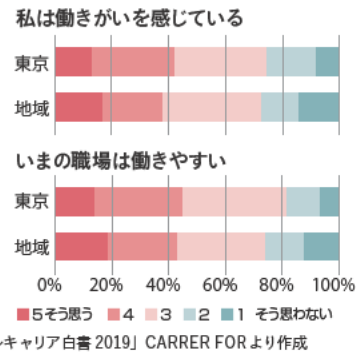
地方で働くメリットは、豊かな人間関係の中で生きる喜びを強く感じられること。最近は、高い収入を得ることだけが幸せな生き方ではないと考えている若者が多いと感じています。

働きやすさや働きがいにあまり差が無いわけですから、「東京か、地方か」と二者択一で悩む必要はないと思っています。地方と東京を行き来する「2拠点生活」を送る人も、これからもっと増えていくはずです。

※1東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査

CARRER FOR（事務局：一般社団法人 地域・人材共創機構）が「ローカルキャリア白書2019」の中で報告したアンケート調査。東京都と地方都市(岩手県釜石市、長野県塩尻市、岐阜県の一部、石川県七尾市、島根県雲南市）の18歳以上のビジネスパーソンなどが対象。P20に調査内容の一部を記載

図2　東京と地域の働きがい・働きやすさの比較



「ローカルキャリア白書2019」CARRER FORより作成

働きがいと働きやすさについて、「そう思う（5）」「ややそう思う（4）」の合計を比較すると、東京と地域で大きな差はなかった。

将来の目標を思い描き成長できる企業を見極める

これからは、転職や起業が当たり前の時代。ということは、自分の価値やスキルを上げることができる会社選びが重要になります。そのために、就職を希望する企業で自身が成長できるかどうかを見極める必要があります。

その目を鍛えるために、まずは将来何をしたいのか、自分のビジョンを描いてみることが大切です。40歳、50歳になった時、どんなことをしているのか。

もちろん、複数あっても構いません。「起業して社長になる」「牧場主になる」「ゲストハウスを経営する」など、さまざまな夢や目標を思い描いてください。

長期的なビジョンを描いたら、実現のためにこの1年で何を努力するのかについて考えることが重要です。将来起業したい人は、学生のうちからビジネスプランコンテストに応募したり、卒業後にスタートアップ企業※2に就職したりと具体的に考えてみましょう。

取り組んだ結果、1年で目標が変わってしまっても問題ありません。努力したことは、成果として残り、次に生かすことができます。まずは、行動に移すことです。

当然若いうちは迷い、なかなか好きなものが見つからないことも確かです。しかし、若いうちから将来の目標を確立することができれば、給料や知名度だけで就職先を選ばなくなると思います。

そして、就職してしまうと、どうしても目の前の仕事に追われてしまいますが、時々将来の目標について見つめ直してください。

※2 スタートアップ企業
まだ世に出ていない、新たなビジネスモデルを開発する企業のこと。一般的に、創業から2～3年程度の企業を指すことが多い

多くの社会人の声から刺激を受けてみよう

就職活動を前に、学生のみなさんには、多くの社会人の話を聞くことや、会ってみることをお勧めします。就職先に悩む学生の多くは、親の職業あるいは「学校の先生」という職業しか知りません。考える職業の選択肢が少なくては、良い就職先にたどり着くことは難しいからです。

NPOで働いている人や役場で働いている人、起業している人、経営者など多種多様な人に触れることで、刺激を受けながら職業観を育ててください。

実社会が抱える課題やニーズを解決するために働く人の声は、仕事のイメージをつかむ最高の教材。学校でも社会人の話を聞く機会があるはずですから、積極的に参加して多くのことを吸収してほしいです。

特に被災地では、復興支援のため多くの人が移住し活躍しています。東京で働いていたときは、地方では想像できないほどの高給で働いていた人たちもいるはずです。

こうした人たちがその地域を選んで、みなさんに多くのことを伝えに来てくれているわけですから、チャンスを逃さないでください。そして、輝かしい未来を思い描いてみてください。

多くの社会人の声に耳を傾けて選択肢と夢を増やしましょう！

横田（よこた） 浩一（こういち）
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授

早稲田大学卒業後、日本経済新聞社に入社。2011年同社を退職後、株式会社横田アソシエイツを設立。2015年～慶應義塾大学大学院特任教授。企業のブランディング、マーケティング、CSV、HRM、イノベーション分野に携わると共に、地方創生に係る。共著に『SDGsの本質』『愛される会社のつくり方』『ソーシャル・インパクト』など多数。釜石市の地方創生にも携わる。

ジモトではたらく

復興の力にと故郷で再就職 地域に根差す店づくりに奮闘

おがわ ゆうや
小川 有哉 さん
株式会社野馬追の里
セデッテかしま副店長
2015年入社　南相馬市出身 28歳

地元のリピーターも多い サービスエリア施設の副店長

常磐道沿線では、福島県内唯一のサービスエリア施設である「セデッテかしま」。地元の食品はもちろん、お土産品を扱う物産コーナーをはじめ、地元の食材や地域独特の味を堪能できる食堂もあり、売り場の一角には地元農家で栽培された新鮮な野菜を販売するコーナーも設けられ、人気を集めている。

さらに、地域行事やイベントを開催できるコミュニティ広場も併設。地域に根差した施設と運営を軸に、訪れた人たちに、南相馬の魅力をPRしている観光施設でもある。

「セデッテ」とは、福島県相馬地方の方言で「連れてって」という意味。利用客が「また来たい」と思うような施設でありたいという願いが込められている。

「サービスエリアとはいえ、一般道からもアクセスが可能な施設ですので、高速道路の利用者だけではなく、地元の常連客も多いんですよ」。そう説明するのは、「セデッテかしま」で副店長として働く小川有哉さん。

お客様の声に応えたい スタッフとの一体感が喜び

副店長の仕事は、施設管理やスタッフのシフト管理、商品の陳列など多岐にわたる。小川さんはお客様が商品を手に取りやすい売り場づくりを心掛け、お客様の行動動線を意識した陳列や、関連商品を一カ所にまとめるなど工夫を凝らしている。

「施設内に設置している意見箱に寄せられる要望や、電話やメールでの問い合わせには可能な限り応えたいと思っています」と小川さん。過去には利用客のリクエストに応じ、利用客が以前購入して好評だったお土産品を発送して、大変喜ばれたこともあったそうだ。

副店長は、店長と交代で勤務することが多く、店長が不在の時は、現場の最高責任者となる。また、行楽シーズンやお盆休みなどの繁忙期には、現場の最高責任者となる。

売り場を巡回して品薄な商品があれば補充する。

衣料品の販売で学んだ接客 地元に就職後もスキルが生きる

南相馬市出身の小川さんは、地元の高校を卒業後、仙台市内の大学に進学。卒業後は、アパレル業界に就職し、岩手県や長野県、愛知県の店舗で働いた。被災地である地元で働くことはできないかと、2015年に地元へUターンし、当時開業したばかりのセデッテかしまに就職した。

「前職の経験から、接客には多少自信がありました。でも、取り扱う商品が衣料品から食品に変わり、商品の知識や取り扱い方をゼロから学ばなくてはならないといった苦労はありました」

初めて経験する食品管理について学ぶため、地元の講習会に参加したり、生産者や業者からのアドバイスに耳を傾けたりした。そこで出会った地元の人たちとの関係が、新たな商品の取り扱いやコラボ商品のアイデアにつながるなど生かされたという。

お客様や関係者からの「こんなに素晴らしい施設がここにあって良かった」という声が小川さんにとっては何よりも励み。「仕事へのやりがいを感じる瞬間です！」とさわやかな笑顔をみせた。

スタッフとのコミュニケーションを大切にする。

小川さんの ある日の動き

※「早番」勤務の場合

- 7:00 **出社**　スタッフと打合せを行い情報共有した後、開店準備に取り掛かる
- 8:00 **開店**　入口でお客様を出迎える。繁忙期はレジに入ることもある。
- 9:00 **事務作業**　前日の売り上げの集計や、スタッフのシフト管理などパソコンで作業をする
- 12:00 **昼食**
- 13:00 **売り場の見回り**　品薄になっている商品があれば補充をする
- 13:30 **事務作業**　午前中の作業の続きや電話対応などを行う
- 16:00 **終業**

上司に聞く 見た目も行動もイケメン 人への気配りが光る

店長　佐藤 孝征さん

真面目に仕事向き合う好青年です。私が忘れていた業務を、さりげなくサポートしてくれる縁の下の力持ちの的な謙虚さも持ち合わせています。

スタッフへの声掛けも丁寧で、みなさんからの信頼も厚いですね。前職でも接客業を経験していたこともあって、お客様への対応や電話応対はさすがだなと感心しています。

私が店にいない間も安心して任せられます。引き続き、自分の持ち味を発揮して一緒に施設を盛り上げていきたいと思っています。

福島県ではたらく魅力

時のアルバイト経験から、接客の面白さに目覚めた小川さん。大学卒業後はアパレル会社に就職した。

「アパレル会社勤務の時は、岩手、長野、愛知を転々とし、初めて住む土地でたくさんの刺激を受けました。接客というやりがいのある仕事に取り組みながら、それなりに充実した毎日を送っていた」そうだ。

大学卒業後にアパレルの道へ 初めての土地で刺激を受ける

子どもの頃から歴史が好き。将来は教員になるのも良いと思っていた小川さんは、高校卒業後に仙台市内の大学へ進学した。「何もない地元から抜け出したいという思いもありましたね」と当時を振り返る。

しかし大学1年生が終わり、春休みに実家へ帰省していた時に東日本大震災が発生し、大学はしばらく休校、原発事故の影響で、家族と共に山形県内などで避難生活を2カ月間送ることとなった。

高校生の頃からファッションに関心を持っていたことや、大学生のたこともあり、時間に追われる毎日を過ごしていた小川さん。一方、地元に帰ってきてからは、慣れ親しんだ土地と仲間に囲まれ、気持ちに余裕が持つことができたという。高校時代の友人とは、なかなか休日が合わないものの、電話やLINEで言葉を交わしてリフレッシュしている。

「他県に住んで感じたことですが、福島の人は良い意味であまりガツガツしていないところもあって落ち着きますね」という小川さん。「仕事を通じてこれからも南相馬の魅力をアピールしたい」そうで、40代、50代になっても、自分がどんな形で地元に貢献することができるのかを考えながら仕事をしているという。

地元産野菜の産直コーナーの商品を整頓する。

遠く離れた地で見た南相馬 故郷に思いをはせ再就職へ

そんな中、社会人2年目となった小川さん。当時愛知県に住んでいたある日のこと、テレビで南相馬の報道番組を見る機会があった。その中では、南相馬は未だに「被災地」として紹介され、同情を誘うような演出がなされ、小川さんは違和感を覚えたという。「すでに地元では、前を向いて頑張っている人がたくさんいるのに」。そういう想いが沸き上がる一方で、自分自身が地元から遠く離れ、今の仕事を続けていても良いのだろうかと考えるようになった。

地元でできることはないかと転職活動を始めた小川さんは、2015年の春にオープンした「セデッテかしま」がスタッフを募集していることを知った。「セデッテかしまなら、これまでの自分の接客の経験が生かせる。もしもこの施設に就職できなくとも、地元で腰を据えて再就職の活動をしよう」と考え、地元の南相馬に戻った。

無事採用が決まり社員となって3年目の2017年には副店長に抜擢された。副店長に指名された小川さん、自分に副店長が務まるのかという不安はあったものの、前任の副店長から、「気負う必要はない。一緒に頑張ろう」という言葉をかけられ、決心することができた。

「副店長とは、入社当時から苦楽を共にしてきました。その時の異動で副店長は店長に昇格したのですが、自分が副店長として彼をサポートしたいという思いで決心しました」と小川さんはそう振り返る。

やはり故郷は落ち着く これからも地域に貢献したい

転職前は知らない土地を転々し

2019年に地元の女性と結婚し、新婚生活を送る小川さん。最近、セルカークレックスという種類の猫をオスメス1匹ずつ飼い始めたという。

「自由気ままで、自分の思い通りにならないところが、心を揺さぶられて可愛い」と目を細める。

なかなか外出できない今は、家族と愛猫と触れ会う時間が大切なリフレッシュの時間となっている。

事務所でデスクワークに励む。

地元食材や郷土料理などを提供する食堂。

後輩へのアドバイス

冬は比較的温暖で雪も少なく、夏は海風で涼しい。高校生まで18年間を過ごした南相馬はやはり居心地が良いですね。

若い時は、どれだけ自分の世界が広げられるかがとても重要です。経験や情報を通して得た気づきが、自分の将来を切り開いていくと思っています。

だから、就職先を決める時は、その後にどんな知見を広げることができるかイメージしてみてください。そして、就職してからもその努力を惜しまないでください。

企業情報

株式会社野馬追の里

所　在　地／福島県南相馬市原町区高見町 2-30-1
T　E　L／0244-26-5100
H　　P／http://www.nomaoinosato.co.jp/
代表取締役／伊藤 博人
設　　立／2007年
資　本　金／2000万円
従 業 員 数／46人（2020年12月現在）
事 業 内 容／道の駅及び常磐自動車道南相馬市サービスエリア利活用拠点施設の管理運営

ジモトではたらく

被災者との出会いから移住へ おもてなしで結ぶ福島と四国

かたおか たかお
片岡 貴夫 さん
旅館 抱月荘
2018年入社　徳島県出身 26歳

震災を乗り越え再オープン 復興関係者も利用する旅館

南相馬市の市街地から少し離れた自然豊かで閑静な場所にある旅館抱月荘。3300坪の日本庭園からは、木々が織りなす豊かな四季の風景を感じることができる。福島第一原子力発電所の事故の影響により、長期の休業を余儀なくされたが、2018年にリニューアルオープンを果たした。

リニューアルオープンからスタッフとして働く片岡貴夫さんは、客室の清掃やベッドメイク、食事の配膳が主な仕事。常にお客様の目線を大切にした接客を意識し、日々勉強中だという。

「当館では、復興関係の仕事で宿泊されるお客様がたくさんいらっしゃいます。全国各地の方々とお話しできて楽しいですね」。復興のために尽力する人たちへの感謝の気持ちを込めて、精一杯のおもてなしを心がけているという。

片岡さんの ある日の動き
※「夕食対応」勤務の場合

- 15:00 出勤
- 15:10 館内の清掃　客室の清掃やベッドメイクなどを行う
- 16:30 夕食の準備　レストランや広間のテーブルに、箸や献立表などを並べる
- 17:00 チェックイン対応　お客様をお出迎え、客室に案内する
- 18:30 夕食対応　食事の配膳などを行う
- 20:30 後片付け　食器の後片付けの後、翌日の朝食の準備をする
- 21:00 終業

慣れない接客に悪戦苦闘 四国出身を強みにスキルを磨く

片岡さんの社会人経験は、大学卒業後に1年間NPO法人で働いたことがあるだけで、ましてや接客業は抱月荘が初めて。「分からないことばかりで、ミスをしてしまい、厳しく注意されることもありました。社会人として未熟な自分が悔しくて、その悔しさを糧に成長へとつなげられるように努力しています」

もともと人と話をしたり、人と関わることは苦にしないタイプだそうだが、現在の仕事において唯一気になるのは、自分が遠く離れた四国出身者であることだったという。南相馬の地に宿泊に訪れたお客様が、四国から来たスタッフの自分と接し、どう思われるのだろうか、接客としてマイナスに働くのではないかと思い悩んだこともあった。

秋の紅葉が美しい自慢の庭園。

客室へお客様を案内する。

しかしそんな悩みも、抱月荘代表の高藤明彦さんから「むしろ四国から来たことを強みにすればいい」とアドバイスを受けて、割り切ることができた。以来、自ら「四国から来ました」と切り出して、お客様と会話するきっかけにしているという。

接客でつなぐ四国と福島 お客様との交流が楽しい

抱月荘では、かつて自分が大学生の時にお世話になった農園のみかんを、わざわざ愛媛県から取り寄せてデザートに使うという提案を採用してくれたり、高知の特産でもあるカツオのたたきに徳島県産のすだちのジュレが添えられていたりと、四国から来た自分に対するスタッフの心遣いがとてもうれしかったという。

「自分自身がここで働いていることで、お食事の面で福島と四国がつながったりして、お客様との話題づくりにつながっています。こうした館全体での取り組みに自分の出身地である四国のエッセンスを取り入れてくれているスタッフのみなさんにはとても感謝しています」

一方で接客を通じて多くのお客様と出会い、新しい話を聞くことができる今の仕事が楽しいという片岡さん。「心を込めた接客でリピーターにつなげ、抱月荘のファンを増やして旅館を盛り上げていきたいです。それが、代表やスタッフのみなさんへの恩返しにつながると思っています」と語った。

抱月荘と南相馬市へ感謝の気持ちが、片岡さんの優しく穏やかな目の奥で熱く燃えていた。

上司に聞く

代表　高藤 明彦さん

真摯に仕事と向き合う好青年 対応力を磨き成長に期待

まじめな性格で、お願いしたことは最後までやり遂げてくれます。旅館の仕事は、決められた仕事だけではなく、さまざまな業務に対応しなくてはなりません。また、朝が早いときもあったり出勤時間が不規則だったりしますが、嫌な顔をせず真摯に仕事に取り組んでくれます。

その真面目さゆえに、融通の利かない部分が見られるので、臨機応変な対応力を磨いてほしいですね。まだまだ20代、これからも一段ずつ着実にスキルアップして、仕事的にも人間的にも成長してくれると期待しています。

福島県ではたらく魅力

夢が描けなかった少年時代
震災の映像を見て心が動く

「小学校の作文で将来の夢がなかなか書けず、苦しみました」と笑う片岡さん。その後も、良い高校を出て、良い大学に進学すれば、良い企業に就職出来て、良い人生を送ることができると漠然とした未来を思い描いていたという。

「高校生の時に経済や経営に興味を持ち、公認会計士にでもなれば、安定した暮らしができるのではないかと思っていました」

高校2年生の3月、東日本大震災のニュースを四国で知り、テレビで見た津波や原発事故の映像に衝撃を受けたという。遠く離れた東北で大変なことが起きてしまった。自分に何かできることはないだろうか??。その思いは、愛媛県内の大学に進学してからも続いた。

大学生の時、南相馬市からの避難者と知り合ったことが、その後の人生を大きく変えた。「その方から当時の体験談を聞き、自分がテレビで見て衝撃を受けた映像をリアルに感じることができました」

四国で被災者の支援活動に参加
大学卒業後に南相馬へ移住

その時の出会いがきっかけとなり、避難者が立ち上げたNPO法人の活動に関わった片岡さん。愛媛県内にいる避難者への支援活動を通して、いつかこの目で被災地を確かめ、復興の力になりたいと思うようになった。「何かをしたい!」と具体的な目標が生まれた瞬間だった。

大学卒業後もNPO法人で1年間働き、さらに南相馬への思いを募らせた片岡さんは、移住を決意する。

まずは仕事を探そうと、インターネットで検索。抱月荘の求人を見つけ応募した。「震災から7年ぶりに営業を再開する旅館で働くことで、南相馬の復興の後押しになると思いました」。面接で代表の高藤さんが話した営業再開を機に地元の復興を後押ししたいという思いも心に響いたという。

抱月荘は2018年に採用。こうして片岡さんは、四国から南相馬に移り住むことになった。

移住者と交流を深め
一緒に南相馬を盛り上げたい

南相馬に来て1年が経った2019年の6月、両親が徳島から南相馬を訪れ、抱月荘に宿泊し

客室の清掃に心を込める。

たという。「これまで何かと心配をかけた両親に、成長した自分の姿を見せることができてうれしかったですね」

福島県浜通り地方の冬は雪が少なく、四国出身の片岡さんでも、思いのほか寒さが厳しいとは感じなかったそうだ。

花が咲く春、新緑の夏、紅葉の秋、そして雪景色の冬。抱月荘の庭園を眺めると、四季の移ろいを感じることができる。「四国では、意識しなかったぜいたくな時間の過ごし方ができています」と片岡さんは笑顔で語る。

まだ、旅館の仕事だけで手一杯であるが、今後はほかの移住者との交流を深めたいという。

「カフェを開いている方や農業を始めた方など、震災後に移住された人たちがたくさんいます。一緒にイベントを開いて、南相馬を盛り上げることができたらいいなと思っています」

縁が結んだ南相馬で、おもてなしを続ける片岡さんは、これからもまちの復興を見届けていく。

池を泳ぐ錦鯉は復興支援でいただいた。

庭園にある池の秋をイメージした前菜。

片岡さんのオフショット

休みの日は、温泉を楽しんでいるという片岡さん。車の中には、いつも入浴セットが常備されている。

「大学生の時に過ごした愛媛県には、全国的に有名な道後温泉がありますが、南相馬周辺にも魅力的な温泉がたくさんあります」

市内の温泉はすでに制覇し、近隣にも足を伸ばしている。「温泉にゆっくり浸かって、身も心もリフレッシュしています」

後輩へのアドバイス

将来の進路を考える時には、職業の種類だけにとらわれるのではなく、どんなことで力を発揮したいかやどんなところで貢献したいかを考えてみてください。

私の場合、大学生の時の出会いが南相馬への移住につながりました。自分の経験や出会いが、その後の運命を大きく動かすこともあるので、若いうちからいろいろな活動に参加して、視野を広げてください。

その場所がみなさんの地元福島で見つかり、復興の力となってくれたらうれしいですね。

企業情報

旅館 抱月荘

所在地／福島県南相馬市原町区馬場字川久保3
TEL／0244-23-5826
HP／https://www.hougetsusou.jp/
代表／高藤 明彦
設立／1970年
資本金／1000万円
従業員数／8人（2020年12月現在）
事業内容／旅館業

農業で復興に貢献 トマトと自分の夢を育てる

かわかみ ゆうすけ
川上 祐輔 さん
南相馬復興アグリ株式会社
グロアー
2015年入社　富山県出身 32歳

最新鋭のトマト生産工場で栽培環境をコントロール

南相馬復興アグリ株式会社が2015年に建設した南相馬トマト菜園では、温室で大規模なトマトの栽培が行われている。

「ここで栽培されているトマトは、土の代わりとなる培地と肥料を水に溶かした培養液で育てています」。そう説明するのは、同社で働く川上祐輔さん。培養液の供給は、コンピュータ管理のもとで自動化されていて、1.5ヘクタールにもおよぶ温室でのトマト栽培を容易にしている。

川上さんは日々の作業の方針を決めるグロアー（Grower）と呼ばれる仕事を担当。病害虫の発生や株の発育状況を常に確認し、葉を摘むタイミングや病害虫対策など1週間の作業スケジュールを工場長と考えるという。

「温室では、4万から6万株のトマトを栽培しています。膨大な量を扱っているので、質より量にならないように気を付けています」

早期発見と素早い対応で病害虫からトマトを守る

ここで栽培されるトマトは、一度培地に植えられ、ほぼ通年収穫される。また、培養液の供給をコンピュータでコントロールすることで適度にストレスを与えながら栽培することで、甘味を引き出しているそうだ。

こうして過酷な条件のもとにさらされるトマトは、ちょっとした異変でも生育に影響が出てしまう。そのため、葉の色や付き方、病害虫の有無など、株の様子をこまめにチェック。異変が見つかれば、すぐに対応するという。

状況によっては、事前に作成している栽培計画の変更を余儀なくされることもあるため、グロアーには臨機応変な判断力と迅速な対応力が求められる。「私一人では、広い温室内の状況を常に把握することは不可能です。そのため、スタッフと協力して多くの目で対応

赤く実った収穫直前のトマト

手を掛けるほど応えてくれるトマトに愛情を注ぐ

トマト栽培については、1カ月ほど研修を受け、最初は病害虫対策を担当した。

菜園では、可能な限り農薬の使用を抑えた栽培に取り組んでいるため、病害虫それぞれについて発生時期や特徴を把握し、最も効果的な措置をピンポイントで行う。

「調べてみると、トマトが非常に病気の多い作物であることを知りました」と川上さん。病気ごとに使用する農薬の種類、散布するタイミングや量などについて探る作業に長い時間と労力を費やしたという。

グロアーになってからは、培養液の供給の管理を担当。コンピュータで制御するアプリケーションは全て英語表記だったため、翻訳ソフトなどを使って、一つ一つ確かめながら覚えていった。

こうして苦労を重ねて育てたトマトが赤く色付いた時は、この上ない喜びを感じる瞬間だという。

「私たちの努力に応えてくれたようでうれしい。そんな健気なトマトがとても愛らしいですね」

オランダ発祥の先進的な温室でトマトを栽培している。

上司に聞く

農場長　成川 陵さん

農業の知識とセンスが頼もしい 発想力と行動力で菜園を支える

川上君とは、当菜園の立ち上げの時からずっと一緒に苦楽を共にしてきました。頭の回転が速く、問題が起こりそうな状況になってもすぐにアイデアを考え行動してくれるので、助かっています。

農業高校で学び、卒業後も農業を志していたこともあって、植物を見る目は到底かないませんし、とても頼もしく思っています。

これからも、次世代を担う若手のホープとして期待しています。引き続きこの菜園でさまざまな経験を積んで成長していってほしいですね。

川上さんのある日の動き

- **7:30 朝礼**
  今日の作業などについて社員で情報共有する
- **8:00 従業員の出社対応**
  パート従業員の調整に立ち会う
- **9:00 午前中の作業**
  株の状態を確認。温室内を巡回しながら各エリアの担当者からも随時報告を受ける
- **12:00 昼食**
- **13:00 午後の作業**
  温室内の環境制御や明日の作業内容について工場長と話し合う
  事務所で書類作成などデスクワークも行う
- **17:00 終業**

福島県ではたらく魅力

実家は米農家 就職先でも米に関わる

富山県出身、米農家で生まれ育った川上さんは、子どもの頃から田植えや稲刈りなどの作業を手伝っていた。休憩中に食べたおにぎりや、祖父が刈草で焼いてくれた里芋のホイル焼きの味は、今でもはっきりと記憶に残っているそうだ。

農作業を通じて食に興味を持ち、いつしか自分で店を経営する夢を抱くようになった。しかし、「店舗の経営は、不安定で厳しい」と両親が反対。若いうちは人間的にも経済的にも力をつけるべきだとサラリーマンの道を勧められたという。

こうして、農業高校卒業後に富山県内の精米機メーカーに就職し、営業担当に就き、会社が経営する有機栽培による米づくりにも参加、栃木県にある民間の研修所でおよそ1年間、米の有機栽培について学んだ。「そこで南相馬から米づくりを学びに来たご夫婦と出会いました」

研修先での出会い 約束を果たすため南相馬へ

研修を通して、夫婦と交友を深め、富山に戻った後もたびたび南相馬を訪ねた川上さん。農業について夫婦と語り合ううちに、一緒に農業を始める約束を交わしたという。

出会いから8年ほどが経ったある日、夫婦から「こっちで一緒にトマトの栽培をしないか」と誘いを受けた。

「東日本大震災で被災した南相馬で役に立つことはないかと考えていたので、移住するならこのタイミングだろうと思いました」と川上さん。こうして、夫婦との約束を果たすため、南相馬行きを決断した。

富山を離れることに、両親の反対はなかった。逆に「大人になったこれからは、思い通りに生きてもいいんじゃないか」と背中を押されたという。

その後、実家に帰省するたびに両親と話題になったのがトマトのこと。というのも、川上さんが南相馬でトマト栽培を始めた影響で、両親も栽培を始めたからだ。「トマトについては、私の方が先輩です。実家では、質問攻めに合っています」と川上さんは笑う。

人情味あふれる地域 雪が少ないのも魅力

南相馬の人は、親切で温かい。地元から通う菜園のスタッフが、自分の家族のように接してくれることが心地良いという。

また、北陸地方と比べて雪が少ないのもうれしい。「富山県は豪雪地帯です。冬になると早朝に起きて、雪かきをするかどうか確認していましたが、こちらではその必要がありません」

米や野菜の栽培のほかに牛や豚の飼育が盛んな南相馬に住むようになってから、畜産にも興味を持つようになった。米と野菜の知識は、ある程度持っている。さらに畜産について学ぶことができれば、自給自足の農業ができるかもしれないと夢がさらに膨らむ。

とはいえ、同社でやりたいことがたくさんあるという川上さん。「トマト栽培全体を見通す力をさらに鍛えたい。何よりトマトがかわいいので、当面は専念したいですね」

自給自足の農業の実現は、まだ先になりそうだ。

トマトの成長を見ながら翌週の作業計画を検討。

温室の中ではトマトの株が整然と並ぶ。

1年間で数万トンのトマトが収穫される。

川上さんのオフショット

休みの日は、映画を見たりゲームをしたりと自宅で過ごすことが多い川上さん。子どもの頃から興味があった料理は、今も力を入れているという。

自信作のラーメンは、麺とメンマ以外は全てお手製。「スープは、鶏ガラをベースに野菜とチャーシューの煮汁、手づくりの塩レモンを合わせて作りました」と話す。完成した料理は、スマートフォンで撮影してSNSで公開しているという。

後輩へのアドバイス

仕事を通して、コミュニケーションの大切さを実感しています。どの業界でどんな仕事に就いても、人と関わることは避けて通れないので、コミュニケーション能力は若い時から磨いておくといいですね。必ず求められるスキルだと思います。

農業は、農作物の成長や実りを現場で働く人と同じ思いを共有できるので、コミュニケーションを取りやすい職業ではないでしょうか。

福島県は、お米も美味しいですし、農業が盛んな場所です。一人でも多くの人が、地元の農業に興味を持ってくれたらうれしいです。

企業情報

南相馬復興アグリ株式会社

所　在　地／福島県南相馬市原町区下太田字川内迫310-6
T　E　L／0244-26-6747
代表取締役／木内 克則
設　　立／2013年
資　本　金／6650万円
従業員数／60人（2020年12月現在）
事業内容／生鮮トマトの栽培 等

都会と地方の違い

―働きがいの意識調査から―

慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
特任教授　**横田 浩一**さん

東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査

働きやすさと働きがい 仕事満足度は変わらない

働きやすさ、働きがい、仕事への満足度について、「そう思う（5）」と「ややそう思う（4）」を足した値は、東京と地方（地域）でほぼ変わりませんでした。（図1、2、3）

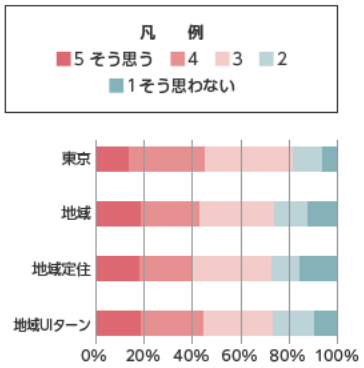


図１：いまの職場は働きやすい

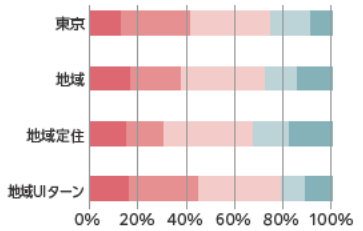


図２：私は働きがいを感じている

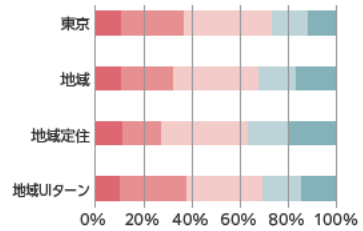
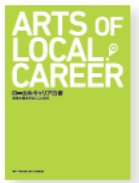


図３：いまの仕事に満足している

調査概要

CARRER FOR（事務局：一般社団法人 地域・人材共創機構）が「ローカルキャリア白書2019」の中で報告したアンケート調査。東京都と地方都市（岩手県釜石市、長野県塩尻市、岐阜県の一部、石川県七尾市、島根県雲南市）の18歳以上のビジネスパーソンから577サンプルを回収。

また、UIターン移住者のサンプルをより多く集めるため、125サンプルを回収した。



このことから、「東京か」「地方か」という場所だけで仕事を選択しなくても良い環境が整いつつあることが、調査結果からもうかがえます。

ここに住みたいという意思が働きがいに影響する

地方にUIターンした人は、東京や地方にずっといる人（地域定住）と比べて働きがいや仕事満足度が高いという結果になりました。（図2、3）

さらに、職場の選択を「やりたいこと」で決めてきた人や、仕事を通して成長や地域貢献を感じている人が多い結果となりました。（図4、5、6）

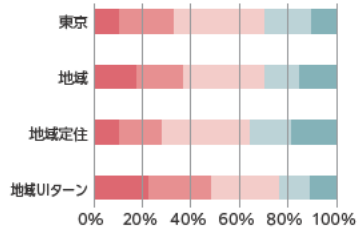


図４：私の職場の選択を「やりたいこと」で決めてきた

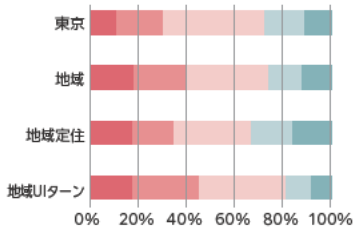


図５：私の仕事は地域（社会）に貢献している

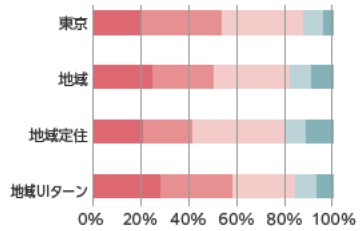


図６：仕事を通じて人間として成長できる

地方にUIターンした人は「地元に戻りたい」「この地域に住みたい」と移住や仕事を決め、高いモチベーションを維持しながら仕事に取り組んでいます。こうした強い意志と充実感が働きがいや仕事満足度に表れています。

地方の仕事は自分の影響力を実感できる

「私の仕事は周りに大きな影響を与える」と感じている人は、地方の方が高くなりました。（図7）

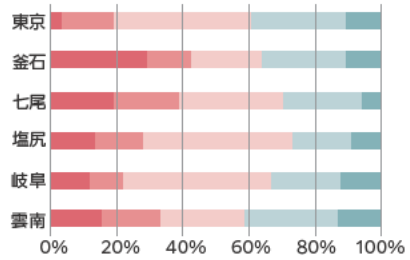


図７：私の仕事は周りに影響を与えている

地元で働くことを考えよう

若い時は、物や情報にあふれ便利な都会生活にあこがれを抱くのは仕方のないこと。就職活動をする学生も、地元を出て就職したいと、首都圏の企業に関心を持ってしまいがちです。

一方、地方にも魅力的な企業や、地元に貢献できる働きがいのある仕事がたくさんあります。また、地元では、自然豊かな住み慣れた場所で、家族や友達と共に安心して暮らすことができるはずです。

この冊子に登場したみなさんは、地元や移住先に魅力を感じながら充実した毎日を送っています。みなさんの地域でも、地元の魅力を知っている社会人がきっといるはず。

こうした人たちから直接話を聞いて、これまで気づかなかった「ジモトではたらく」魅力について考えてみましょう。

仕事の規模や動くお金の額は、東京の方が大きいことが想像できますが、周囲への影響については、地方の方が実感できるという結果となりました。

地方では、地域のさまざまな人と関わりながら、プロジェクトを成し遂げることが多く、その時に「ありがとう」と感謝されたり、自分の成果が目に見えやすかったりすることが、影響の実感につながったと考えられます。

一方、東京の場合は、大きな組織の中でビジネスが動くため、個人の影響を実感しづらいのかもしれません。

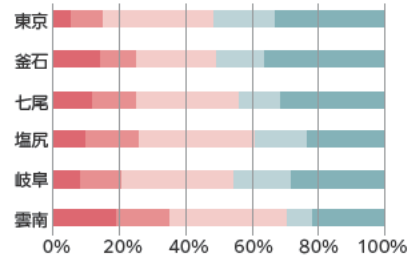


図８：定期的にあって話す地域コミュニティがある

人のつながりを強く感じる地方での働き方

地方では、身近な地域コミュニティを持っているという回答が東京より高くなりました。（図8）

市民や行政、NPOなど、多種多様な人が関わっている地方では、人と人とのつながりが強く、東京の場合は、ビジネスライクの付き合いもあり、どちらかといえば関係が薄いと考えられ、人のつながりという観点からは、地方と東京で違いが見られました。

被災地で強く感じる人への感謝と働きがい

「人生において感謝することがたくさんある」という項目について、釜石市では半数以上の人が「そう思う」と回答しています。（図9）

これは、震災復興に向けたつながりや、共助の経験が反映されたと考えられます。

また、釜石では、これまで復興支援に多くのボランティアが集まり、そのまま定住した人が多くいます。「復興のため」という明確な目的をもって移住し、地域の人と共に働いている被災地は、どの地域よりも働きがいを実感できる場所ではないでしょうか。

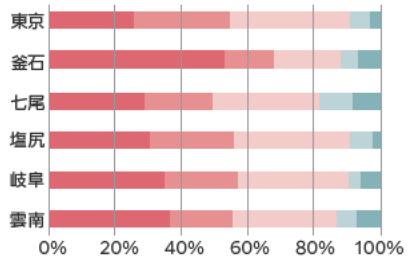


図９：私は人生において感謝することが多い

問い合わせ先

復興庁雇用促進班
TEL. 03-6328-0274